

3. 地域人財を活用した地域と相思相愛の学校づくり

～生徒の可能性を引き出す協働的な学びの実践～

石川県立能登高等学校長 屋敷 秀樹

1. 能登高校の沿革

能登高校は、創立17年目の学校である。明治31年に設立された石川県水産講習所を前身とする水産科の水産高校と情報通信科の水産小木分校、昭和41年に石川県立宇出津水産高等学校普通科を分離して発足した普通科の宇出津高校が、平成12年に統合し普通科と水産科を持つ能都北辰高校となった。また、昭和12年に設立された石川県柳田農学校を前身とする農業と福祉が学べる柳田農業高校と、昭和17年設立の町野町立町野女子補習学校を前身とする普通科の町野高校が、平成14年に統合され普通科と総合学科を持つ能登青翔高校になった。さらに、平成21年に能都北辰高校と能登青翔高校が統合され、1学年が普通科・地域創造科各2クラスの能登高校となり、さらに平成28年に普通科・地域創造科（現在は、地域産業科）が各1クラスとなり、現在に至っている。

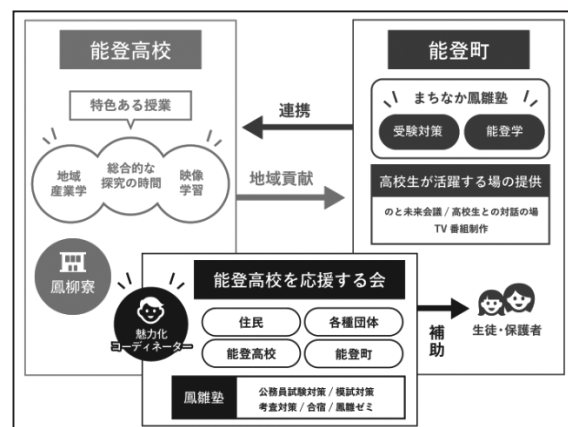
この沿革により普通科は2年次より、文系・理系・福祉のいずれかを選択して学習している。一方、地域産業科は、1年後期より農業・水産・商業に分かれて学習している。本校の大きな特徴は、石川県内で水産を学ぶことができる唯一の学校である。

2. 能登高校を応援する会

能登高校が開校した平成21年に、「能登高校に在籍する生徒が勉学やスポーツを始めとした教育活動等に専念できるよう支援し、能登高校が末永く存続し発展することを願い、各種事業をおこなうこと」を目的とした、地域住民や能登町役場などからなる、「能登高校を応援する会」が発足している。

事業内容は、制服購入補助（15,000円以内）、通学費補助（定期券・回数券購入価格の5割）、部活動補助、国立大学入学一時金支援、校内公営塾「鳳（ほう）雛（すう）塾」支援などがある。

「鳳雛塾」では、能登高生を対象に定期考査対策・公務員講座・模擬試験対策・夏季および春季休業中の学習合宿等を行っている。



【能登高校を応援する会の位置付け】

また、能登町には、能登町内の中学生と能登高生を対象とした、公営塾「まちなか鳳雛塾」（「鳳雛塾」「まちなか鳳雛塾」とともに指導するスタッフは同じだが、校内で本校生徒全員を対象に指導している「鳳雛塾」、校外で塾生登録している生徒を対象に指導している「まちなか鳳雛塾」）がある。令和5年度の塾生は1年生11名、2年生11名、3年生15名であった。「まちなか鳳雛塾」は、塾主導で指導計画を立てるのではなく、生徒の自主的な計画に沿った学習支援をしている。この取組が、生徒の自主的な学習へとつながっている。学校と「まちなか鳳雛塾」間で、塾生に関する情報共有が十分でなかったという、これまでの課題については、令和5年度より体験日・入塾日・退塾日などを記

載したスプレッドシートで塾生名簿を共有することで改善を図った。さらに、令和6年度からは、学習動画や生徒が取り組む課題の内容および進捗状況を共有することとしている。

また、「能登学」と称した年4回行われる地域学講座「鳳雛ゼミ」は、能登高校・「能登高校魅力化プロジェクト」・「まちなか鳳雛塾」の協力によって行われる課外学習の場である。地域の魅力や問題・課題を知ることがねらいで、令和5年度は、能登で起業することをテーマに、起業家による講演を通してアントレプレナーシップを醸成するとともに、生徒が地方の発展について考える貴重な場となっている。

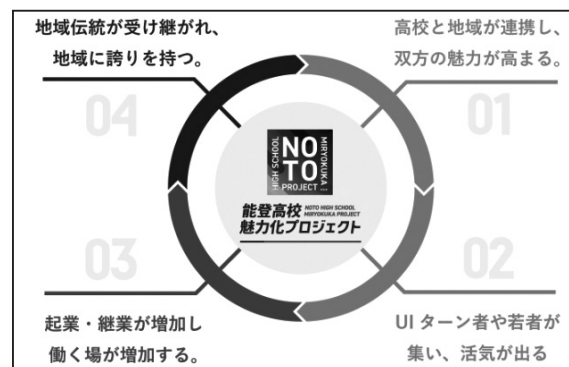
さらに、能登高校を応援する会の活動をより効果的にするため、令和5年度より、能登高校・能登町役場からなる、月1回の「能登高校を応援する会打合会」を設け、連携を強めた。参加者は、高校からは校長・教頭、能登町役場からはふるさと振興課担当課長兼地域戦略推進室長を含む職員3名と高校魅力化コーディネーターの計6名である。この打合会では、「能登高校を応援する会」の既存事業のみならず、能登高校の活動を外部から見た際の課題について忌憚のない議論を通して、学校の現状や課題、高校の将来像を見据え、能登町役場や「能登高校を応援する会」が今後可能な支援や必要な取組について議論する貴重な場となっている。この取組は、平成28年12月21日の中央教育審議会答申「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に唱えられている、社会に開かれた教育の3つのポイント「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創るという目標を、学校と社会とが共有」「これからの社会を創り出していく、子供たちに必要な資質・能力が何かを明らかにし、それを学校教育で育成」「地域と連携・協働しながら目指すべき学校教育を実現」に合致しており、能登町役場の職員の中には、生徒の保護者もいることから、本校には学校運営協議会は組織されていないものの、この打合会がそれに該当すると考えられる。以上のことから、

本校は実質的にコミュニティ・スクールとなっていると認識している。

3. 能登高校魅力化プロジェクト

能登町は、平成28年より町内唯一の高校である能登高校の魅力を高めることで、持続的なまちづくりに繋げることを目的とした、「能登高校魅力化プロジェクト」に取り組んでいる。高校は人材育成の場、地域活動の場、経済活動の場として町には欠かせない場所である。生徒が通いたい、保護者が通わせたい、教職員が働きたいという魅力的な高校となることをねらいとしている。

内閣府の「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」では人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる負の悪循環とされている。そこで、「能登高校魅力化プロジェクト」では、「高校と地域が連携し、双方の魅力が高まる」「U I ターン者や若者が集い活気が出る」「起業・継業が増加し働く場が増加する」「地域伝統が受け継がれ、地域に誇りを持つ」の好循環を創り出すことを戦略としている。

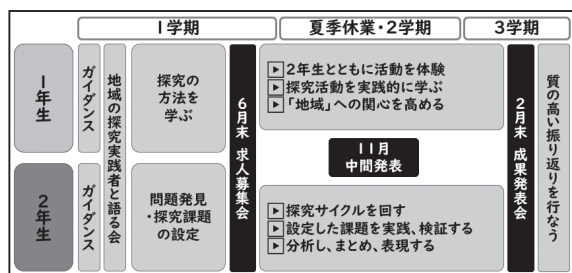


【目指す好循環】

4. 総合的な探究の時間

本校の「総合的な探究の時間」は、1・2年の普通科・地域産業科が、学年およびクラスの枠を外し、合同で活動する点が特徴である。指導は、1・2年学年団の全教員と、「能登高校魅力化プロジェクト」スタッフが当たるとともに、高校魅力化コーディネーターが総合アドバ

イザーとして、学校と探究活動に協力してくれる企業・団体・個人等との橋渡しの役を担っている。



【総合的な探究の時間スケジュール】

4月には、1・2年生が「能登高探究パートナー」と称する、地域の事業者や町役場職員、福祉事業者などの方々から、日々の仕事の中で持っている「問い（探究テーマ）」とその思い、具体的な行動について、ポスターセッション形式で学ぶ機会をいただいている。令和5年度は20の企業・団体が参加した。

企業・団体	探究テーマ（問い）
1 空杣（そらそま）	林業
2 数馬酒造（株）	情報発信
3 独立行政法人国際協力機構（JICA）北陸センター	国際協力・外国人材受入支援
4 社会福祉法人能輝人	福祉・介護
5 ひらみゆき農園	農業
6 （株）SCARAMANGA	デザイン・メディア
Doya Coffee	カフェ・接客
7 ノトノカ	林業・精油製販
8 能登町定住促進協議会	移住定住
9 能登森林組合	林業
10 石川工業高等専門学校	建築・設計
11 ツエーゲン金沢	スポーツビジネス
12 サポートスズ	芸術・イベント
13 しらさぎ保育所	保育
14 金沢大学理工学域	水産・海洋研究
15 北陸放送MRO	マスメディア
16 北菱電興	エンジニア・IT
17 真脳ポーレポーレ	観光・宿泊
18 あくあず能登	海洋深層水販売
19 むらのもちや（北能産業）	農業・販売
20 能登町役場（ANA）	観光・交流

【能登高探究パートナー】

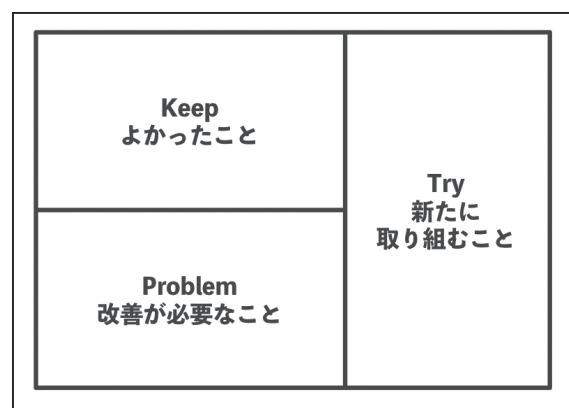
また、2年生は1学期に、自分の「興味」「好きなこと」「疑問」を探究して「地域を元気にする」をテーマに、1年間探究したいテーマに

ついて考える。このとき、指導者はファシリテートすることを意識するとともに、「地域」を「高校生にとって今、身近な範囲＝自分以外の誰か、何か」と、「元気にする」を「今より少しでも良くなる、喜ばれる」と定義することで、能登町の問題・課題にこだわらない、高校生の身近にあるさまざまなテーマにも目を向けることができるように意識している。

5月には1年生が、探究活動の必要性を学ぶとともに、ゲーム「ヘリウムリング」（フラフープを数人の生徒の指先で持ち上げ地面に降ろす、コミュニケーションを促進するゲーム）を通して探究プロセスを体感し、KPTシート（「よかったこと」「改善点」を洗い出し「課題に対して取り組むこと」を図る手法）を使った振り返り活動を体験する。



【ゲーム（ヘリウムリング）】



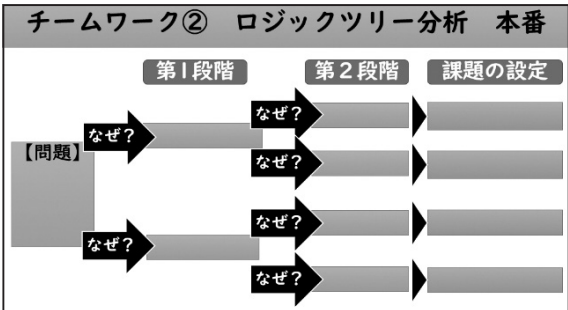
【KPTシート】

6月には1年生が、能登町長による町の現状、課題、町としての取組についての講話を聞き、能登町創生総合戦略にある4つの戦略（①人材の育成と安定した雇用ができる「しごと」の創出、②人と人との交流を深め賑わいの創出、③結婚・出産・子育てができる「環境」の創出、

④地域力を高め安心して暮らし続けられる「まち」づくり)のうち、生徒が大切に感じる戦略を1つ選び、その理由を共有し、その実践について考察していく過程で、ロジックツリーを活用して、問題を原因分析して課題設定する体験をしている。



【能登町創生総合戦略】



【ロジックツリー分析】

6月には、2年生が1年生に対して、一緒に探究活動を行うメンバーを募集する「総探求人募集発表会」を行う。これにより、1・2年生合同のチームが編成され、探究活動が進められる。1年生は、2年のプレゼンテーションを聞き、理由も含めて第1～3希望のテーマを選出した。その結果、令和5年度は1チーム1人から8人の22チームが編成された。

11月には、中間発表会を行い、生徒や教員、外部の方々から指導を受けることで、探究内容をさらなるブラッシュアップを図っている。また、年間の活動計画や発表会の日程、運営方法については、令和5年度より6人の生徒からなる運営方法探究チームが企画および運営に当たっている。

例年1月には、探究活動の発表会を行っているが、令和5年度は、能登半島地震のため残念ながら延期とした。

令和6年1月、石川県地場産業振興センター

1	アップサイクルでつかめ!おからの夢
2	能登の野菜を有名にしたい。
3	能登のハチミツを使って商品開発!!
4	能登に来てくれる人を増やそう!
5	どうすれば日本酒の後継者が増えるのか?
6	能登活性化プロジェクト
7	能登の赤崎いちごにスポットライトを!
8	地域との交流
9	自然や飲食店を生かして日本や海外の観光客を増やす
10	能登から学校をなくさないために!
11	能登高校健康増進プロジェクト
12	どうすればKidsと高校生が気軽に関わり合い笑顔あふれるより良い町づくりを行うことができるのか
13	海ゴミ変身大作戦!!
14	どうしたら能登町のお店と能登高校の関わりを作ることができるのか
15	英語を好きになってもらおう!!
16	どうしたら能登町外の人に祭りについて知ってもらい、祭りに参加する人を増やすことができるのか
17	能登高校の魅力発信!!
18	どんな校則にすれば能登高生がより良くなるのか。そして能登高校がより良くなる為には、校則をどんな風に変えれば良いのか。
19	どうすれば全てのチームが外部と連携し地域にいい影響を与えることができるレベルの高い探究活動を行うことができるのか
20	災害による被害を最小限におさえたい!!
21	地域デザイン
22	能登がジオパークされないのか?

【令和5年度探究テーマ】

において、石川県教育委員会主催の県内SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)校などの生徒が集う、生徒研究発表会において、本校2年の生徒2名が「能登の水・加賀の米で作る パーソナライズ海中熟成酒」をテーマに、探究活動の成果を発表した。能登の魅力を発信することを目的に、「のと」と「かが」を掛け合わせることで、需要の少ない若い女性をターゲットにした、個人の志向に応じた日本酒を提供するという、ユニークな発想は参加者から高い評価を得た。このアイディアは、能登町の酒造会社から、「ターゲットを絞ること、ネット

販売を活用することで、需要を掘り起こすことは可能である」とのアドバイスから、生まれたものである。

求人票（能登高校2年生総探）	
チームメンバー	
1. 探究テーマ	
例1：観光 例2：能登町の魅力をたくさんの観光客に発信する。	
2. 探究テーマに対する自分たちの思い	
・能登町以外の人に能登の魅力について知ってもらうことで観光客を増やしたい。	
3. 探究をすることで地域に与える影響	
・能登の観光客が増える。 ・能登の魅力が伝わる。 ・観光客が増えることで経済が潤う。	
4. 求める人材	
・写真を撮るのが上手い人 ・能登のキレイな景色を知っている人 ・能登の魅力をたくさんの人に知ってもらいたい人 など	

【探究運営チーム作成の求人票】

5. 課題研究

3年地域産業科は、農業・水産・商業それぞれの分野で課題研究に取り組んでいる。ここでも、高校魅力化コーディネーター等の支援を受けている。例えば、未利用のサバをフィレにしたフィッシュバーガーを開発したチームは、11月23日に販売活動を実践した。このプロジェクトの実現に、地域の数多くの企業・施設の協力があつた。地元のパン屋の方からは竹炭入りのバンズの提供を受けた。能登町宇出津港水産物加工処理施設からは商品価値の低い不揃いのサバの提供とミンチ機を貸していただきフィレを作成した。柳田植物公園のレストランからは販売の場所とフライヤーをお借りし、その場で揚げたてのフィレを挟んで販売した。また、能登町ケーブルテレビには、販売案内のCMを作成と、生徒が販売の様子を放送していただき、地域に発信することができた。加えて、「能登高

校魅力化プロジェクト」スタッフには、販売を案内するチラシを作成していただいた。その結果、100個用意したバーガーは完売し、味も大変よいと評判になり、町長に試食してもらう機会も得た。その様子はその他、各種メディアでも大きく取り上げられた。



【フィッシュバーガー】

また、町内におけるeスポーツの普及を企画したグループは、まず能登高生とその保護者にアンケート調査を実施してeスポーツに関する世代間の意識差を捉え、「保護者世代がeスポーツをもっとポジティブなものと理解すれば、eスポーツの普及につながるのではないか」との仮説を立てた。その上で、能登高祭にて校内eスポーツ大会を実施、さらに能登町が姉妹都市締結をしている宮崎県小林市が開催するeスポーツイベントにオンラインで参加することで、イベントの運営方法を学んだ。これらの活動を通して、研究を深め、12月24日に小学生とその保護者を対象とした「ぷよぷよeスポーツイベント」を開催した。開催するにあたり、企業の協力で、eスポーツに必要な機材や、1位の商品「寒ブリ1本」、参加賞の賞品「ネットで利用できる図書券500ポイント分のクーポン」等の提供を受けた。また、能登町役場からは大会会場の提供、能登町ケーブルテレビには事前のCMおよび大会の様子の放送の便宜を得た。このイベントには、県外から2名の参加者もあり、盛り上がりを見せたことから、冬の恒例イベントとして実施することで、交流人口の増加と町

の活性化につながるのと総括となった。

能登高生のつくった「フィッシュバーガー」「ぷよぷよeスポーツ」いずれも、魅力化コーディネーター、能登町役場、地元企業等の協力により実現し、生徒たちの深い学びにつながった好事例である。



【ぷよぷよeスポーツ案内】

6. 地域みらい留学365

本校では、令和3年度より「地域みらい留学365」という内閣府主導の事業により国内留学生を受け入れている。高校1年生を対象に募集し、高校2年生の1年間を本校で学ぶ留学制度である。令和5年度、「地域みらい留学365」に本校を含め、11道府県22校の登録があった。

「地域みらい留学365」は、「高校生の地域留学推進のための高校魅力化支援事業」として、令和2年度にスタートした。地域での経験を通じて「自ら未来を創る力」を育むと同時に、地域で出会った多様な仲間と共に「地域の未来」をも育んでいこうという意欲のある高校生のチャレンジを応援することを目的としている。

本事業3つのポイントに対する、本校の強みを以下に記す。

1 「地域ならではの魅力を感じ、新たな挑戦ができる環境」

本校では、世界農業遺産を学びの場として、

都会では感じられない本物の自然や文化に触れ、感性が磨かれ人間力が高まる。生徒数が少ないからこそ、一人ひとりの好奇心に合わせたチャレンジが可能である。寮生活を通し、協働する力・自律心を養うことができる。

2 「地域や世代を超えた、多様な仲間との新たな出会い」

まったく新しい人間関係を構築する中で、生まれ育った環境も価値観も違う同世代の仲間と切磋琢磨し、教員や地域の方々のサポートも受けながら自ら未来を創る力を育む。学校の教育活動に協力的な地域の方の力を借り、学校だけでなく地域をフィールドに、様々な課題解決に取り組むことができる。留学前・留学後の研修を通じて参加する全国の地域留学生同士の交流のみならず、本校生徒との関係が加わり刺激的なネットワークを築くことができる。

3 「安心の費用や万全のサポート体制・留学先の寮費」

留学生の制服等は、能登町から支給されるため、食費等の生活費程度の負担で留学が可能である。学習面は「まちなか鳳雛塾」サポートする。さらに、令和5年度からは、能登町から「能登高校を応援するサポーター」に認定された家族の支援を受け、休日等に町内での活動を行うことができるようになった。

本制度は、自治体が内閣府に申請し、地元の高校に留学生を受け入れる制度である。能登町役場では「ふるさと振興課地域戦略推進室」がその担当窓口となっている。能登町役場と能登高校が連携し、令和2年度から地域産業科での受け入れに向けて準備を始めた。具体的には、パンフレットの作成・チラシの作成・能登高留学のホームページ (<https://notoko-ryugaku.com/>) 作成・能登高校のホームページ (<https://www.ishikawa-c.ed.jp/~notoxh/>) の刷新を行った。

令和3年度（本校、「地域みらい留学365」の1期生）の男子生徒は、香川県立高校全日制課程普通科に在籍している生徒であった。香川県から自転車で能登町まで来たことから、注目

を浴びた。本校の水産選択で学習し、小型船舶2級の免許を取得し在籍校に戻った。



【初年度チラシ】



【能登高留学ホームページ】

寮生活を通して、1学期の始業式までには友人もでき、4月に来校したばかりとは思えないほど本校生徒たちに馴染んでいた。その後、日本財団「海と日本PROJECT」の一環で開催された、LOCAL FISH CANグランプリで、決勝大会（最終審査）に進出し「アゴダゴ汁」（だしを取るためによく使われるがそれ以外の活用法があまり知られていないトビウオを材料に選び、アジやイワシのつみれ汁をモチーフにして作られただんご汁のこと。トビウオの地元での呼称「アゴ」と、だんご汁の呼び方「ダゴ汁」を合わせ命名）の商品化にこぎつけた。また、コロナ禍で令和4年度に延期になった本校の修学旅行にも、留学中一緒に学んだ生徒たちと一緒に参加し、令和5年3月の本校卒業式にはお祝いに駆けつけ、翌日、在籍校で自分の卒業式に出席した。この生徒は能登高校での留学生活で水産系大学への進学意欲を高め、国立大学水産学部へ進学した。

彼のコメントが、地域みらい留学365のパ

ンフレットにも掲載されているので紹介する。



【店頭にならんだアゴダゴ汁】

能登高校に留学した理由：元々魚が好きで、生態系について興味がありました。高校進学でも水産系に行こうとしたのですが実技系が多く、大学進学のことを考えると、断念しました。でも高校生活を過ごすうちに大学と高校の水産科の違いを知りたくなり、留学しました。

留學生活の印象：自分の学びたいことにたくさん触れることができました。実技で船舶免許を取得したり、探究の授業で能登の小学生に海の魅力を伝えたり、実際に魚を利用した缶詰の開発を行ったりしました。特に印象に残っているのは、能登の海の課題解決のため、生物の養殖にチャレンジしたのですが、なかなかうまくいかず、課題解決をする難しさに直面したことです。

能登での経験の活用：魚について本気で学ぼうと思えた原点となった場所が能登です。面接で話したことはほとんど能登での経験や学びのことでした。大学に合格したのは能登高校での留学生活のおかげです。

大学生活の意気込み：まだ具体的に何を研究するかは決まっていますが、魚について研究

を進めて大学生活を楽しみたいです。

一方、受け入れにあたり苦慮したのは、教育課程における科目の読み替えである。普通科に在籍する生徒が水産科目を選択するため、学習指導要領を精査し、学習内容から科目の読み替え案を在籍校に提案し承認を得た。また、留学後在籍校に戻った際、履修に困らないよう一部科目は2年普通科の授業に参加することとした。そのため、留学生用の時間割を作成し運用した。事務手続きの煩雑さから、令和3年度5名としていた募集枠を、令和4年度からは3名とした。

令和4年度（2期生）は、東京都の私立高校全日制課程普通科に在籍する女子生徒が地域産業科農業選択に、茨城県を本校とする広域通信制私立高校に在籍する女子生徒が地域産業科水産選択に、福井県の私立高校全日制課程商業科の男子生徒が地域産業科商業選択に、計3名が留学してきた。全員、同じクラスに在籍しながらも選択が異なることから、令和3年度同様、3人それぞれの時間割を作成し対応した。この年の留学生はそれぞれ、留学後に北海道に鹿狩りに出かけたり、コロナ禍が明けた令和5年7月に3年ぶりに行われた、能登町最大の祭り「あばれ祭」の見学に来たりと、活発であった。とりわけ、令和6年元日にあった能登半島地震の際、支援物資を届けてくれた生徒には感謝しかない。そして、何よりも嬉しかったことは、高校卒業後に再び能登に戻って就職することを決断した生徒がいたことである。

一方、世界農業遺産に指定されている里山里海での探究活動を本校生徒と深めて欲しいことと、普通科在籍の生徒がより留学しやすくするため、令和5年度からは、募集対象に普通科を加えた。さらに、地域みらい留学制度を運営している、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームが、広域通信制のNHK学園高等学校での一部科目履修で単位取得ができる制度を設けたことで、令和5年度から科目の読み替え作業が不要となった。

令和5年度（3期生）は、東京都の私立高校

全日制課程普通科から1名、神奈川県私立高校全日制課程普通科から1名、同県の県立高校通信制課程から1名、計3名の女子生徒が普通科に留学してきた。本校の寮は、能登町役場のある宇出津から約10km離れた山間部の柳田地区にある。そのため、留学生の意思で、自由に町内を散策することはできない。そこで、より地元と交流を深めてもらうために、協力家庭で祭りの期間中、寝泊まりをして「あばれ祭」を見学できる環境を整えた。3人は能登町の写真を撮り集める、和太鼓や笛の演奏に興味を持ち地域の人に習う体験する、アーチェリー部に所属する者など、それぞれの自分の興味に合った活動を行っていた。

一方、NHK学園高等学校で単位取得ができるようにはなったが、在籍校と本校の教育課程の違いから、NHK学園で必要な科目がそれぞれ異なるため、留学生個々人の時間割が必要なことには変わりはない。

		4/17(月)						
		1	2	3	4	5	6	1
2-1	A	国表	数Ⅱα	日史探	公共	化学Ⅱ	英Ⅱα	数Ⅱα
	B	化学Ⅱ	数Ⅱβ	地理探		物理Ⅱ	英Ⅱβ	数Ⅱβ
2-2	農	食管				数Ⅱα	論国	農環
	水	簿記	保健	生産基	体育	数Ⅱβ		漁業
3-1	A	数Ⅱα	古典	体育	Ⅲα	数Ⅱα	英ⅡⅠ	英ⅡⅠ
	B	数Ⅱβ	生物物理		Ⅲβ	数Ⅱβ	化学Ⅱ	化学Ⅱ
3-2	農		化学Ⅱ	地総実	地総実	農機	農機	日史A
	水	国表		地総実	地総実	食製	食製	地理A
地み	〇〇	国表	数Ⅱ	日史探	NHK	NHK	英ⅡⅠ	数Ⅱ
	〇〇	国表	NHK	地理探	NHK	化学Ⅱ	英ⅡⅠ	NHK
地み	△△	国表	数Ⅱ	日史探	NHK	NHK	英ⅡⅠ	数Ⅱ
	△△	国表	NHK	地理探	NHK	化学Ⅱ	英ⅡⅠ	NHK

令和5年度前期時間割

令和6年度（4期生）の留学予定3名から、能登半島地震があったものの2月末の段階で、辞退の申し出はない。以上、本制度は「能登の魅力」を全国各地の若者に知ってもらい、交流人

口を増やす」という目的は十分に果たしていると言える。また、地元生まれ育った本校生徒にとっても、育った環境や価値観の異なる生徒との交流を通して、お互いの視野を広げる貴重な機会となっている。

一方、令和7年度は、「地域みらい留学365」に加え、令和6年度入試から全国募集を導入したことから、高校3年間で能登高校で学ぶもう一つの留学制度「地域みらい留学」を新たに展開することとしている。

7. 全国募集

石川県の一部の公立高校において、令和6年度より全国募集が始まった。特色ある教育活動を行っている、本校をはじめとした7校11学科（コース）が対象である。本校では、普通科はソフトテニス部、地域産業科はソフトテニス部と水産選択を希望する生徒を対象としている。

これまでの「地域みらい留学365」の経験から、交流人口を増やし、地元生徒の視野を広げ、多面的な思考力育成のためにも、大きく期待される取組であり有効に活用していきたい。

8. 地域人財を生かした教育活動

能登高校のPTA活動は、保護者の方が大変協力的である。例えば、春と秋に「おはよう声かけ運動」と称して、登校時に保護者が校門や生徒玄関、各地区のバス停であいさつ運動を展開している。学校や自宅近くのバス停で参加する方が多い中、期間中参加できないことを理由に、別日に校門に立ってくれる方もいる。また、秋の土曜スクールに合わせて、保護者が生徒にカレーをふるまう「カレーの日」がある。ここでは、お米や野菜はほぼ保護者から提供されるため、購入するのはカレールーと肉のみである。

能登町ケーブルテレビも大変協力的で、学校行事の際は、必ず取材し放送してくれる。また、本校生徒による探究活動に係る動画編集の支援においても協力していただいている。

能登町には、町外より移住してきた「能登高

校魅力化プロジェクト」や「定住促進協議会」のスタッフがいる。また、農業・林業・水産業・商業に関わる方が数多くいる。その中には、早くからSDGsに注目し事業を拡大している方、里山里海の価値を見出し休耕田の活用に尽力している方、農園を経営しながら6次産業に進出し、古民家を利用した宿泊業にも事業を拡大している方、芸術を前面にイベントを企画しにぎわい創出につなげている方、未経験でありながら移住し林業に携わる方、地元でWebサイト作成に携わる方、建設業者の農業部門で6次産業に進出した方もおられる。能登町には、このように積極的に能登町のために力をそそがれる方、意欲的にさまざまな分野で挑戦する貴重な人財が多いことが強みである。

また、能登町内には金沢大学理工学域の研究施設や石川県水産総合センター、のと海洋ふれあいセンター、能登里海教育研究所があり、各種機関からも、探究活動で支援を受けている。このような唯一無二の人財・各種機関の協力を得て、総合的な探究の時間、課題研究、地域みらい留学365、全国募集等、本校の教育活動が展開されている。

9. 能登半島地震

令和6年1月1日の能登半島地震では、全国の自治体、多くのNPOや高校から支援物資や義援金をいただいた。このような支援に対して心から感謝する。本校は、宇出津校舎と柳田校舎があり、宇出津校舎は大きな被害を免れたものの、2か月以上断水が続いた。海に面しているため、避難所とはならなかったものの、災害復旧支援者の宿泊所に指定された。また、奥能登全域で、道路の損傷が激しく、路線バスの運休が続いた。そのため、自宅で生活できても、登校できない生徒が約7割と数多くいた。一方、高台にある柳田校舎は崖の崩落がひどく、震災から2か月たっても、電気・水道・ガスが復旧しなかった。そのため、農業の実習施設と寮の使用に目途が立たない状況であった。

こうした中、避難所で高校生有志が「子ども本部」を設置し、自主的に当番やシフトを決め、避難所運営に携わったり、能登高校を拠点に炊き出しを行うNPO法人キャンパーの配膳を手伝ったりする生徒が出てきた。また、その生徒の提案で、公民館に自主避難している方々への夕食提供も実現した。

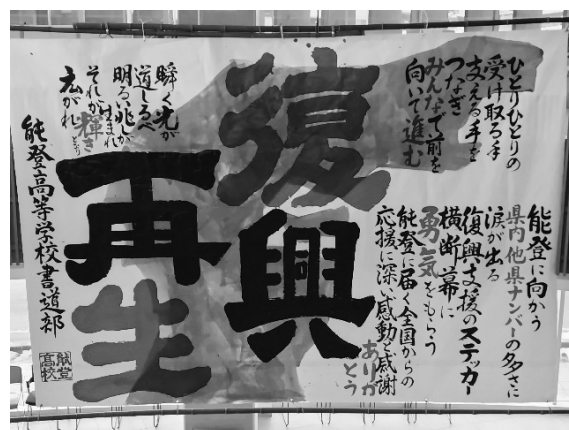
さらに、「総合的な探究の時間」に、「子ども保育・子育て」をテーマに探究したグループは、昨今頻発する大規模災害の際、避難所などで子ども達のケアをするための「こどもお助け隊」の準備が必要であるとの結論に至った。探究活動の成果を具現化するため、12月26日に能登町役場危機管理室でプレゼンテーションを行い、災害発生時の協力依頼をした。その直後に能登半島地震があったため、「能登高校魅力化プロジェクト」のスタッフがNPO法人カタリバの協力を得て1月12日から能登高校に子どもの居場所「みんなのこども部屋～わくわくぷらざ～」を開設した。その後、日曜・祝日・学校行事で視聴覚室を使用する日を除く毎日活動している。ここでは「こどもお助け隊」の準備が活かされ、能登町役場から借りたビブスをスタッフや高校生ボランティアが着用して子どもたちを見守っている。「孫が毎日、ここへ来るのを楽しみにしている」といった家族からの謝辞や、「まだ、〇〇が部屋に来ない。先生、教室行って〇〇呼んで来て」といった子どもたちの誘いが励みとなり、毎日ボランティアで小学生の遊び相手をする生徒がいた。

「地域みらい留学365」の留学生の中には、こんな時だからこそ寝食できる場所があれば、能登町でボランティア活動をしたいと申し出る生徒、支援物資の提供を申し出る生徒、自分の大好きな能登が地震のせいで「怖い所」と思われたくないとの理由から、T i k T o kにきれいな能登の日常風景の動画をアップし、大きな注目を集めた生徒がいた。

書道部は、日頃、書道パフォーマンスの機会を提供し応援してくれる町民にエールを送りた

いとの思いから、能登町役場の入口に掲げる作品制作を申し出て、3日で作品を完成させた。「復興再生」を柱に、「ひとりひとりの受け取る手 支える手をつなぎ みんなで前を向いて進む」などと書かれたメッセージは、誰が読んでも不快にならず、町民の思いを表現するものとなるよう意識して作成された。これが、町内全家庭に配布される「広報のと」臨時号の表紙に紹介されたことから、多くのマスコミの取材を受け、注目を集めた。さらに、同じような作品を作成して欲しいとの依頼がいくつも舞い込み、活動の範囲が一気に広がった。

NPO法人キャンパーの協力で、登校する生徒の昼食は提供できたものの、教員の人数不足と登校できない生徒が多いことから、午前で授業を終えることが大半であった。そこで、能登町ボランティアセンターに連絡し、高校生ボラ



【書道作品】

ンティアの派遣を提案したところ、快く受け入れていただき、午前の授業後教員も加わり、倒壊の危険性のない家屋内の清掃等のプログラムで活動することができた。ボランティア希望者を募ると、登校してきた生徒の3割ほどがボランティア活動に参加した。

さらに、支援団体と能登町職員との繋がりから、ソフトテニス部の宿泊・食事・オンライン学習の環境・練習場所を提供してくれる自治体が現れ、3月2日から3週間もの間、3月28日に行われる全国選抜大会に向けての練習を行うことができた。

また、コロナ禍に入学し能登半島地震の復興支援中に卒業する生徒を、少しでも元気づけたいとの思いから、3月1日に挙行了した卒業式において、NPO法人キャンパーの支援によりお菓子の詰め合わせを全校生徒・職員に配付するとともに、「能登高校魅力化プロジェクト」から一青窈さんのサプライズコンサートがプレゼントされた。一青さんからは、「みんないろいろな夢を持っていると思うが、誰かが必ず見ているから頑張って」と、励ましの言葉があった。

能登町ふるさと振興課からは、1月4日に、町として支援の申し出があり、仮設トイレの設置、寮の代替施設や仮設住宅の設置を依頼した。その結果、能登町からは寮の代替施設の提案、NPO法人キャンパーの協力で、仮設トイレの設置や昼食の炊き出しなどの支援を受けることができた。

能登町役場がこのような非常事態においても県立高校である能登高校に対して迅速に提案、支援してくれるのは、地域と連携した教育活動を通じて築いてきた協力関係と信頼関係があり、能登高校が能登町にとって大切な人財育成機関として位置づけられているからに他ならない。

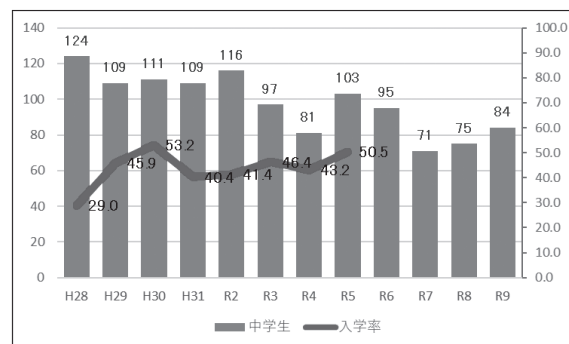
また、自主的に活動する生徒が多いのは、日頃より地元と連携した教育活動が行われていること、能登高校が多大な支援を受けていることを生徒も肌で感じ自覚していること、地元の現状と課題を理解し、地元の発展の一助となりたいと考える生徒が多いことに他ならない。

10. 終わりに

下のグラフは、本校が普通科・地域産業科各1クラスのクラス減になった、平成28年度以降の町内中学生数と町内から本校への進学率を示したものである。

町内中学生の能登高校への進学率は50%を切っていたが徐々に高まり、令和5年度は50%を越えた。過疎化、少子化の流れの中で、地元の生徒に選ばれる学校でなければ、中長期的な学校の存続は難しい。令和6年度学力検査（高

校入試）では、能登半島地震の影響を心配したが、本校では前年とほぼ変わらない出願者数69名（前年71名）となった。



【中学3年生の人数および進学率】

今後とも、地域人財を積極的に活用した、本校オリジナルの教育活動を通して、校訓である「自主・協調・創造」を体現できる生徒の育成に取り組むとともに、本校の魅力を町内外に発信し、学校の発展につなげていきたいと考えている。